

ロバート・モリソンとその『通用漢言之法』

何 群 雄

目次

はじめに

一、プロテスタントの中国への伝道のパイオニア(小伝)

二、中国語研究に関する多くの業績

三、「実用文法」について

四、grammarの範囲

五、品詞論と統語論

六、性数格と時制、述法などについて

七、東洋と漢字

おわりに

はじめに

ロバート・モリソンおよびその著訳である6大巻の『英華字典』や、最初の中国語訳聖書で完訳の『神天聖書』などについてはたいへん注目され、多くの研究業績が挙げられている一方で、同じ著者による初期の重要な中国語文法の1つである『通用漢言之法』(*A Grammar of the Chinese Language*; Serampore 1815)はこれまで注目されたことが少ないようである。その理由は本書の見かけの貧弱さにあろう。だが、その貧弱さの反面にこそ中国語文法學説史にとって重要な情報が隠されていると思われる。

第一、本書は19世紀以前にカトリック宣教師によって書かれた同類著作にくらべ、時期的には大分遅いにもかかわらず、先人の成果があまり参考

にされていない。英語で書かれた最初の中国語文法書の一つとして数えられ、本書には中国語文法の原始的な形が示されていること。

第二、本書では「実用文法」という考え方を最初に明言し、貧弱ながら理論的に中国語文法を説明していること。

拙稿はこのような視点から当著作を読み直すものである。

一、プロテスタントの中国への伝道のパイオニア(小伝)

ロバート・モリソン (Robert Morrison 1782-1834) は中国に派遣された最初のプロテスタント系の宣教師であり、プロテスタントの中国への布教の「パイオニア」といわれている。1782年1月5日イギリスのノースムベルランド (Northumberland) 生まれ、8人の子供のいる家庭の末子であった。若いころ、一時期、靴型職人の父親の仕事を手伝った。1801年1月19日、キリスト教に入信し、ニューカッスル (Newcastle) 長老教会の牧師レイドラー (Rev. W. Laidler) から初級程度のラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語などの知識を習得した。1803年1月7日、ロンドン近郊のホクストン (Hoxton) にある非国教派のアカデミーに入った。1805年ロンドン外国伝道会に入会し、ゴースポート (Gosport) でボーグ博士 (Dr. R. Bogue) について勉強した。1806年からロンドンで中国人の楊善徳? (Yong Samtak) について中国語を習った。1807年1月31日当会から中国に派遣され、アメリカを経由して9月4日マカオに到着した。1809年2月20日マカオでイギリス東インド会社の役員の娘モートン (Morton) と結婚し、その日から東インド会社の中国語通訳を務め始めた。1817年アマースト卿 (Lord Amherst) 使団の通訳として北京入りし、中国での通商、布教の自由を求める交渉に従事したが、成果をあげらずに帰らせられた。1818年マラッカで英華書院 (Anglo-Chinese College) を設立した。1824年一度帰英するに際して、長年にわたって収集した一万余冊の漢籍をロンドン大学に寄付することを交換条件として当大学に中国語の講座を開かせ、イギリスの中国学はここに発足したと言われている。1834年7月イギリスの駐広東副領事に任命され、一カ月後の8月1日過労のため急死した。

二、中国語研究に関する多くの業績

1807年1月20日付でロンドン外国伝道会は中国へ赴くモリソンにあてて以下のような指令書を発した。

「あなたの将来の本拠地は確定できないので、いかなる明確な指示を規定しても、あなたの行動が制限される可能性がある。それは非常に不利なことだと考えた上で、わたしたちはあなたに全権を与える。あらゆる場合に、自らの知恵と判断によって、仕事を適宜に行う。……あなたが数学家の職務を見つけて、数学の各学科を教えることを望む。さもなければ、英語を教えてもよい。……中国語が完璧にできるようになるという大きな目標を達成するまで、反対されることなく、広州に住むことができると堅く信じている。」「……あなたは一冊の中国語辞典を編纂するという好運に恵まれる可能性がある。……あるいは『聖書』を人類全体の三割を占める人々が喋っている言葉に訳すという好運に恵まれる可能性もさらにある。」¹

モリソンの生涯でもっとも重要な三つの仕事は、この指令の中に全部含まれている。

まず、第一にあげられるのは『聖書』の中国語訳である。全21巻からなる『神天聖書』という中国語訳聖書の全訳はその成果であった。『新約全書』の部は、大英博物館で見つかった18世紀に中国の四川省に赴いたパリ外国伝道会のフランス人宣教師のバセ（J. Basset ? - ? ）によって訳された『四史攷編』という訳本を基礎として、モリソンが独力で訳した。『旧約全書』の部は、モリソンとミルン（William Milne 1785-1822）が二人で分担して、共同で訳した。訳文は明快、単純であることを基本方針とし、余り一般的でない古典的用語より、日常使用している用語を選ぶことを原則としている。しかしながらこの方針によって翻訳された漢訳聖書は、中国人にとって必ずしも理解し易いものではなかった。その後、いくつかの改訂訳ができ、漢訳聖書の基礎の一つとなっている。

第二は、『英華字典』（*A Dictionary of the Chinese Language*）という全3部、計6巻より成る中英辞書の編集であった。各部の構成と内容などは以下の

ごとくである。第一部、表題には「字典」という題名を付けている。全三冊よりなる中英字典で、中国語字典（主に『康熙字典』を参照したという）の体裁に従い、部首順に配列し、英語による解説を加えている。第二部には、「五車韻府」の表題があり、初めてのアルファベット配列による中英辞書であった。冒頭の序文によれば、『五車韻府』は中国語語彙の集成にその生涯を捧げた陳先生が編纂をはじめ、弟子の合一胡により補訂されたものであり、非常に優れたものであった。モリソンはそれを底本としながらも、語の配列などにはかなりの工夫を加えつつ、新しい中英辞書2巻を編集した。第三部は480ページより成る英中辞典である。当時において、ヨーロッパの言語で作ったあらゆる中国語辞書の中で、もっとも優れたものであるという評判であった。

ほかにも、*Vocabulary of the Canton Dialect*（広東省土話字彙）；Macao, 1828 という方言辞書を作成している。この辞書は、三つの部分より成る。第一部は202ページで英語から中国語（広東語）へ、第二部は90ページで中国語（広東語）から英語へ、第三部は354ページで中国語（広東語）の単語と熟語などかなる。

第三は、中国語の学習であった。これはモリソンが成し遂げたすべての仕事の基礎であり、伝道会指令の中でも第一の任務であった。自ら初期の中国語学習ノートに基づいて、後輩宣教師のために、いくつかの中国語学習用テキストを纏めた。その中で、もっとも重要なのは『通用漢言之法』であるが、そのほかにも、まだ幾つか別の書物があった。それは以下の通りである。

Dialogues and Detached Sentences in the Chinese Language（中国語対話集）；Macao, 1816. pp.262.

これは一種の会話学習用テキストであった。全体は31段の対話といくつかの付録より成る。対話の内容はお茶、木綿などの商売用の応対用語、主人と使用人の対話、官府との対応など日常に役だつ生活用語が多いが、そのほかにも『紅樓夢』、『西廂記』などの小説や戯曲から抽出したものや、諺や、笑い話などがある。付録としては、度量衡、漢数字、干支記年、招待状、公私の手紙及び封筒の書き方、官府の告示などを収めている。前書きによると、このテキストは、東インド会社のために、著者自らの早期の中国語学習ノートに基づいて書いたものであった。

A View of China, for philological purposes (言語学的見地からの中国概観); Macao. 1817. pp. vi+141.

中国語の中でよく出てくる歴史地理、政府官職、風俗習慣などに関する、現代風に言えば、文化常識にあたる常用単語集になるであろう。本書の構成は、まず中国語の見出し語を並べ、それに続いて英語の解釈を付けるというものである。その主な内容は下記のようなものである。①歴史紀年及び歴史大事件についての簡単な記事。これは清朝から遡って、「三皇五帝」まで、王朝順に叙述したものである。一つの王朝を一節にして、まず歴代皇帝の年号、諡号と西暦の対照表を挙げる。その次に、当該王朝の大事件を述べる。王朝の交代、中外関係、辺境少数民族、政治制度、風俗習慣などは叙述の重点である。時々、西洋同時代の大事件と対照的に並べたところもある。主に『綱鑑易知録』から取材したそうである。②地理概要。満州、中原各省、旧藩モンゴル五十一旗、新藩モンゴル、西域、新疆、新疆蕃属、朝貢諸国などの順番で、主な地名、その経緯度、特殊な事情(蟹戸、チベット仏教など)などを述べている。③官僚制度。中央三省六部及び地方文武官職の名称、九品制度などを説明している。④天文暦法。二十八宿、二十四節令、十二時辰、主な祭日などを叙述している。⑤儒、釈、道の三教、婚喪習俗、八卦などに簡単に言及している。最後には、「あとがき」と一つの英語索引を付加している。「あとがき」で、中国語の学習方法などを紹介している。

Chinese Miscellany (中国語雑記); London, 1825. pp.52, and plates, pp. 12.

中国語に関する以下のような短い論文を納めている。*Chinese Miscellany* (中国語雑記)という題名の下では、漢字の特性を論じた後、373個の小篆、214個の部首、411個のローマ字つづりの中国語音節という三つのリスト並びにそれについての詳しい説明を挙げている。*Extracts from Chinese Authors* (中国人作者の著作からの抜粋)という題名の下では、いくつかの民間の諺らしい例文を挙げそれにローマ字つづりの読み方、英語の訳文などを付け加えている。*Literature of the Chinese* (中国文学)という題名の下では、文学、歴史から地理学、医学にいたるまで中国の伝統学術を広く紹介している。*A Summary of the Chinese Ancient Books* (中国古典の概要)という題名の下に、「四書

五経」を概説している。Notices of European Intercourse with China, and of Books Concerning it (ヨーロッパと中国の交渉並びに関連する書物についての簡単な紹介)という題名では、古代から本書が書かれた18世紀20年代までの中国と西洋との交流に関する文献記録や、西洋における中国研究などを紹介している。最後に、Conclusion (結論)を付けている。

三、「実用文法」について

その外には、拙稿のメイン資料となっている *A Grammar of the Chinese Language* (280+6pp.) があり、本書の表紙にはさらに漢字の縦書きで「通用漢言之法」と書かれ、その下に Serampore : Printed at the mission-press, 1815 とするされている。

「序文」の中で著者は幾分の誇りを抱いて、「これは英語で書かれた同類著作の嚆矢である」² と書いている。しかし、それより一年前の1814年に同じ Serampore で別に一冊、英語で書かれた中国語文法書がすでに出版されていた。それは、すなわちマーシュマン (Joshua Marshman 1768-1837) の『中国言法』(*Clavis Sinica*) であった³。二人はそれぞれ、『聖書』を漢訳し中国語文法を書くという、ほぼ同じような仕事を先を争うようにやっていたが、所属教会の違いにより、お互いに相手の存在さえ全く知らなかったという。なお、『通用漢言之法』の序文の日付は1811年3月2日であった。一説によると、本書は印刷するために1810年の時点ですでにベンガルに送られていたが、何らかの原因で出版はかなり遅れていた。その原因についてはいくつかの研究論文が言及しているが、総じて推測の域を出ていない。その真相は今のところなお謎に包まれているままである。

序文の中で、モリソンは以下のように述べている、「本書の目的は、中国語の学習者に実用的な援助を与えることである。中国語の性質に関するあらゆる理論的な論考は意識的に避けた。このような問題についての議論はもうすでにたくさんあるが、しかし、今までのところ、われわれの言語で学習者に対して実用的な援助を十分に施してはいない。この文法書がある程度このような欠点を補うことを希望している」⁴。純理論的な追求をしないのが本書の方針であり、その代わりに翻訳における英語と中国語の対応関係を指し示すのが主なやり方である。それは本書の構成を見れば明らかである。例えば「動詞・未来形」の

ところには、

“The Future Tense

is made by *tseang* 将, about (to be;) *tseang lae* 将来, about to come,
and *how* 後, afterwards; *hou lue* 後來, after come.

‘I shall have.’

我 *Go I* 将 *tseang* shall 有 *you have*.”⁵

英文法の項目を次々とあげて、適当な中国語の例文を並べて、それを英語に訳し、簡単な解説を加える。何の解説もつけない場合も多い。仮に解説があっても、もっとも多いのは、英語の「どれどれ」は、中国語では「どれどれ」だと表現するような程度のものであった。執筆に際して、著者は手元に常に一冊の何らかのヨーロッパ言語の文法書を置いて、それを見ながら本書を書いたか、あるいは脳裏にこのような文法体系がすでに定着していたので、書くときには自然に筆に湧いてくるように出てきたのかもしれない。その元になった本は英語のものか、ラテン語のものかはわからないが、体系からみれば、英語から取ったものが多いように思われる。

このような原因で、本書は文法書よりむしろひとつの文法体系に沿って編集した英語・中国語の対訳虚詞辞典に近いものになっている。例えば「前置詞」と「接続詞」の部においては、

前置詞

of	之, 的。	for	替, 代, 因為。
into	往, 進, 入。	within	裏, 裏面。
without	之外, 除了。	with	同, 用, 以。
down	下。	from	自, 由, 從。
to	到, 至。	at	在, 到。
on or upon	上。	in	内, 之間, 之心, 中間, 於。
up	上, 起。	over	越。
below, under	底下。	above	高過於, 首上頂。
under	之下。	before	前。

behind	後。	beyond	之外。
against	挨埋(埋, 広東語?)		
over against	対面。	through	通。
about	周圍, 大約, 及。	among, amongst	在這些之内, 之中。
between	中間。	near	近, 自……至。

接続詞

though, although	雖然。	and	而, 及, 又, 並。
if	若, 儼, 如。	so	如是, 以致。
as	照, 如, 既, 隨。	as soon as	即時。
lest	如不是。	than	於。
because	因。	neither	兩個不是。
both	兩個。	unless	不然。
notwithstanding	尚且。	yet	還。
but	但, 惟, 但是, 即, 然。	nor	亦不。
either, or	或……或。		

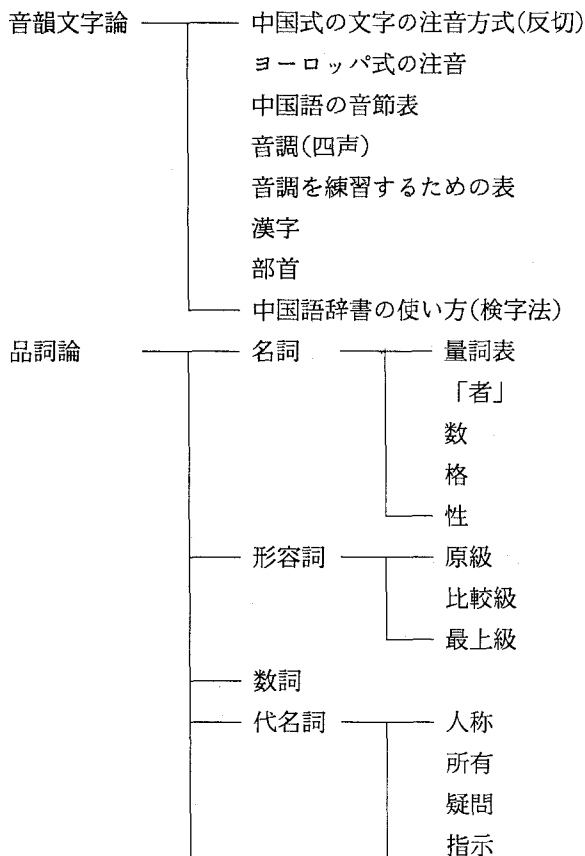
まず英語を見出しとして取り上げ、その次にこれに対応する中国語及びその例文、英訳文をつけ加えて、一つの項目を終えている。もし配列順序をアルファベット順、或は漢字の部首順などに替えれば、ただちに虚字辞書や語彙表のようなものになるはずである。

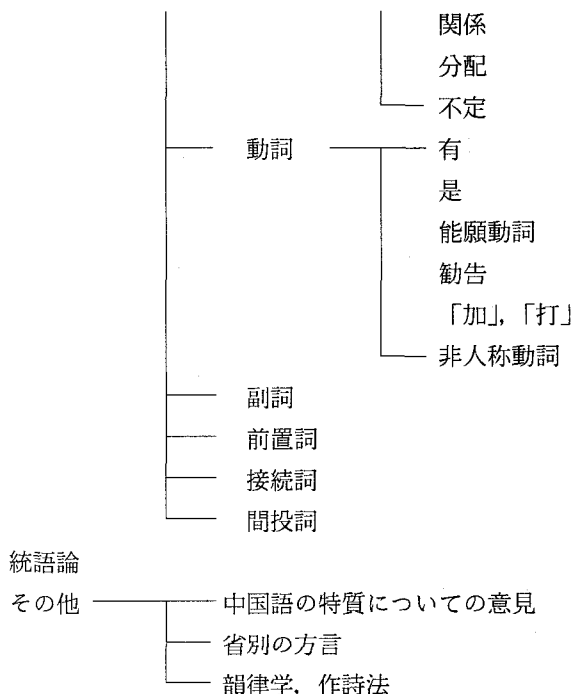
文学史は、ラテン語から欧州俗語やそのほかの中間的な形の諸言語を経て、中国語までに至り、その学問は大きな変貌を成し遂げた。ラテン文法では、その主な内容は、音韻屈折によって表した品詞の役割の変化とシンタクスにおける品詞同士の支配-対応関係であるが、小辞と語順はさほど重要なものではなかった。近代欧州俗語や、ユーラシア大陸の中間地帯に渡る遊牧民族が用いるいわゆる膠着諸言語の場合では、音韻屈折が少なくなるに連れて、語順と小辞は次第に重視されてきたが、その重要性は中国語ほどではなかった。ラテン語とは対照的に中国語では音韻屈折があまり発達していない。虚詞と語順は中国語文法のもっとも重要な手段となっている。このような実情を反映し、これに対応するために、中国語文法学の内容もほぼ全く違うものとなった。例えて言

うならば、同じお碗を研究対象としても、木のお碗と鉄のお碗とは、入れ物としての役割は一緒であるが、その造りかたは全く違うようなものである。文法学は単なることばの組み合わせの規則を研究する学問としてだけ名前を残した。その内容と研究方法は大きな変貌を成し遂げた。

四、grammar の範囲

今のところ、文法学といえは、どうしても「品詞論」や「統語論」だけの話になりがちだが、19世紀以前の中国語文法書はどうもそうではないような一面があった。例えばモリソンの『通用漢言之法』の構成は以下のようにになっている。





このような構成を見れば、まず気づくのは、ここにいう grammar の範囲がほぼ現在の中国語概論に相当するものであることだ。19世紀以前の西洋人宣教師たちによって書かれた中国語文法書は、この面についてほぼ同様であった。音韻から始まって、文字、品詞、統語など、あるいは作詩法、方言、中国語の性質まで、と全面的に論ずるかたちのものがほとんどである。

その原因には二つあると思われる。まず、本書の源流となっている中世ラテン文法は現在の文法学の範囲よりずっと広いこと。次には中国語の実情を考慮していろいろ工夫した結果であることだ。

中世ラテン文法、普通、二つの部分によって構成されている。「第一は、記号の性質上のもので、つまり音と文字として扱われる。第二は、それが表す意味で、つまり人間が自分の考えを表明するためにそれを使用する仕方である。」⁶ つまり、当時の文法書はまず記号の体系を紹介する部分があり、ある言語を記録するに当たって、いくつかの母音、子音をあらわす文字が必要だとい

う内容のものである。この部分は後世、独立して音韻論と文字論になった。中世以前はまだ分かれておらず、文法学の一部となっていた。故に、当時の文法学の範囲は品詞論と統語論だけではなく、音韻、文字論までが含まれていたのである。初期入華宣教師の中国語文法はこのようなラテン文法を手本として書かれたものであるので、まさに中世ラテン文法学の学問的な性質を反映して、そこには文字からシンタクス論までのすべてが含まれていた。

さらに、中国語の場合、固有文字である漢字がある。grammar は「文字の学問」であり、学問の性質から見れば、漢字の学問は grammar に入れるべきだと考えていたらしい。その上、外国人の学習者のためにローマ字をも使っている。そこで、文字体系に関して、インドーヨーロッパ諸言語を表記する場合はただ音を表すアルファベットのような音標文字だけが使われるが、中国語の場合ではローマ字と漢字の二つの系統となってしまった。モリソンの時代では、ローマ字は単にすでに使い慣れた西洋人宣教師にとって中国語学習の入門時における臨時の手助けに過ぎず、使い捨ての割り箸のようなものであった。中国語を表す本当の文字はあくまで漢字だと彼は考えていたらしい。より詳細的な論述は「七、東洋と漢字」の節を参照されたい。

このような事情により、文法書の内容は上記のようにふくらみ、文法学の範囲も現在より一回り広がっている。

五、品詞論と統語論

かつて、呂叔相氏は『（馬氏）文通』は字を実字と虚字の二つに分類し、さらに実字は名字と代字、静字、動字、状字に、虚字は介字と連字、助字、嘆字（間投詞）に分類した。この九つの分類は基本的には合理的であるので、これまでのところ、『字』を『詞』に改めた以外は、大きな変化はなかった。現在通用している分類と比べてみれば、ただ数詞は形容詞（静字）から分かれて、一つの単独の分類になり、量詞という分類を増やした。そのほかには、ある品詞の分類を幾つかの子目に分けた。例えば、名詞の中には方位名詞を、動詞の中には馬氏がすでに分けた同動、助動以外に、方向動詞を増やした。そのぐらいの進歩にすぎない。」⁷と語っている。実は、宣教師の文法書にはこのような品詞の分類がすでにできていた。『馬氏文通』と現在の通用する分類、モリソン文法の三者の品詞分類を並べると、下表のようになる。

現在の術語	馬氏文通	モリソン
名詞	名字	noun
形容詞	静字	adjective
動詞	動字	verb
代詞	代字	pronoun
副詞	状字	adverb
介詞	介字	preposition
量詞		numeral
数詞		number
連詞	連字	conjunction
助詞	助字	particle
嘆詞	嘆字	interjection

表から明らかなように、『馬氏文通』より「モリソン文法」の方が詳しく、量詞と数詞も分類され、現在の通用体系とほとんど同じものであることがわかる。なぜならば、現代通用している中国語文法学の術語は主に英文法から導入したものであるので、『馬氏文通』より「モリソン文法」により近くても不思議はないわけである。

ラテン文法を一から学びながら中国語文法を書く中国人にとってはこのような作業は難しかったかもしれないが、西洋人にとってこのようなやり方は比較的易しいことであった。ラテン文法や英文法にすでにある文法体系をそのまま引き移して、中国語の例文を適当に入れ込めば、全部の作業が完成するわけである。西洋人宣教師によって書かれた中国語文法は、ラテン文法をすでに身につけている外国人の宣教師たちが中国語を学習するために作られたものであったので、このようなやり方を選んだわけであろう。

品詞論の分類はラテン文法をそのまま引き移して完成したが、統語論にはいると、難問が湧いてきた。著者は、「厳密に言えば、中国語の形容詞は（私たちはすでにこの術語を使っているが）性、数、格の区別がないので、それは自動的に実詞と呼応する。また、動詞もあらゆる人称、単複数において同形であるので、常に主語と呼応する。最後に、名詞の形式も動詞の影響によって変化することがないので、ここでは、呼応、支配という、普通、統語論の最も重要な部分をなしている領域は全く必要がないのである」⁸ という認識に基づき、

「文章における単語の正しい語順についてのいくつかの注意が中国語文法の統語論に含むことができるすべてである」⁹と述べている。つまり、語順は中国語文法の統語論の主な内容だとモリソンが分かっていたにもかかわらず、ラテン語にとって語順は重要でない。英語においてはラテン語よりやや重要な役割を果たしているが、中国語に引き移して、完全に適用できる体系はその当時においてまだ完成していなかったもので、最初から始めるしかない。結局、次のようなものしか作れなかった。

「1. 主格の名詞は所有格の名詞の後に置かれる。

例えば、這個人之兒子（この人の息子）。

兩広総督大人（両広総督殿）。

2. 官職の次にその官職を担当する人間の名前が置かれる。

例えば、順徳県周祚熙（順徳県＜知事＞周祚熙）。

香山県彭（香山県＜知事＞彭）。

3. 動作の時間の表現は動詞の前に置く。

例えば、他明天将来（彼は明日来る）。

4. 日付を表すには年、月、日の順番である。

例えば、嘉慶十六年二月初一日稟（嘉慶16年2月1日申す）。

5. 形容詞はふつう名詞の前に立つ。

例えば、高山（高い山）。好人（良い人）。

時々、名詞の後ろに来る場合もありうる。

例えば、地方好大。好大地方（たいへん広いところ）。

6. 特別強調の場合、形容詞は名詞の後ろに付く。

例えば、事情大（重要な事柄）。

這個係一端事敝得狠（この件は非常によくない）。

7. 時々、形容詞は名詞のあいだに動詞を挟むことによって名詞から離される。

例えば、大有關係（大きく関わっている）。

8. 文章の頭にある「無」は、特別の表現がない限り、文全体にかかる。

例えば、無処不聞、一方不見者（どこでも聞ける、どの方向からでも見える）。

無義之不詳，一音之不備(注釈が詳しくない単語，欠けている音素は一つもない)。

9. 二重否定は強い肯定になる。

例えば，其船無不被壞了(壊されていない船がない)。

你無不知(あなたは知らないことがない)。

你不得不知(あなたは知らざるを得ない)。』¹⁰

一見してすぐ分かるように，これは非常に貧弱なものである。厳密な体系はもちろんのこと，すべての要点を掴んでいるとも言い難い。

六、性数格と時制，述法などについて

インドーヨーロッパ諸言語はいわゆる屈折語であり，名詞の性，数，格や動詞の叙法，時制，人称などの形態変化がある。それと対照的に中国語はいわゆる東洋の孤立語であり，形態変化はあまりそろっていない。このような言語構造上の開きによって，ラテン文法を中国語に引き写すに際して，必ず不都合が生じてくる。ある程度の理論的な説明が必要になるわけである。それについて，著者は「すでに言ったように，中国語の単語は一つの音節によって構成されている。ここで，私たちは中国語には何の語尾変化もしないことに注目する。名詞は数，格，性によって語尾変化しない。動詞のあらゆる叙法と時制，人称の前にも同形を保つ」¹¹，「単数も複数も名詞は同形である」¹²，「厳密に言えば，中国語の名詞には『格』というものはない。なぜなら，それらは語尾変化しないからである」¹³ とはっきり言っている。その次に，「しかし，本書はこの言葉の学習に実用的な援助を与えるために書いたものであって，一般的な格の区別を保留する」¹⁴ と書かれている。理論上の解釈はともかく，学習者に実用的な援助を与えるために，学習者として想定された宣教師はすでにラテン文法に慣れ親しんでいたので，そのような項目を便宜的に設けて，それと対応する中国語の表現を教えるのが本書のやり方である。例えば，「普通，他の言語の中での格変化と動詞の変化にあたるものは，中国語においては，もう一つの単音節語(つまり漢字である一引用者)によって行われる」¹⁵ と解説されている。確かに中国語の単語(漢字)は単音節語であるので，語尾の変化や，音声の屈折がないが，それに替わるものとして，もう一つの音節語(漢字，すなわち「虚詞」で

ある)を付け加えて、そのような役割を果たさせるわけだと著者は考えている。
例えば、名詞の部においては、

「名詞の格は虚詞によって構成される。

虚詞の『的、之』は属格を構成する。例えば、

憲官的筆（憲官の筆）。孟子之母（孟子の母）。」

「与格は主に虚詞の『與、過、對』によって構成する。例えば、

你與他送這箇（これを彼に送って）。你對他說（彼に言って）。」¹⁶

「奪格は『由、自、從、同、以』によって構成する。例えば、

他由英吉利国到広東来了（彼はイギリスから広東に来た）。

請尊駕同我出街（私と一緒に街へ出よう）。

所惡於上，勿以使下（上の人にされたくないことを下の人にもするな）。」¹⁷

動詞の部では、「動詞のあらゆる人称の単数と複数は同形を保つ。叙法と時制は助詞によって作られる。これらの用法は実例によって説明する」¹⁸ と簡単に説明した後、動詞の「to have, to be, do, must, ought, should, may, can, will, let, to advise……」などの順番で、それぞれに対応する中国語の表現を紹介している。各項目の下で、「人称、単複数、時制、叙法」ごとに例文を上げ、訳文をつけている。例えば「to have」の場合、

「to have は漢字の『有』で表現する。

直接法、現在時制

単数：我有（私が持っている）。

你有（あなたが持っている）。

他有（彼が持っている）。

複数：我們有（私たちが持っている）。

你們有（あなたがたが持っている）。

他們有（彼らが持っている）。

我有一本書（私は一冊の本を持っている）。」

「疑問：你有甚麼貨物賣（あなたは何か売りたい商品を持ちですか）。」

「未完了時制：我先時有（私は昔持っていた）。

我前時有（私は前持っていた）。

我従前有（私は以前持っていた）。」¹⁹

以下、「完了時制，過去完了時制」などの時制，およびそれぞれの叙法を次々に並べている。要するにそれぞれの時制，叙法に対応する中国語の表現を紹介するわけである。そうするとまた一種の虚詞論に近いものとなってしまった。「しかし，学習者は常に虚詞が使われていると期待してはならない。このような虚詞を省略する場合もしばしばある。例えば、『天朝法律』。²⁰とある。ここには，属格を表す「的」或は「之」は使われていない。このような場合においては文脈によって判断するしかない。

とにかく，理論上の議論をなるべく避けて，英語と中国語の翻訳上における意味の対応関係を読者に紹介するのが本書の主旨なのである。

七、東洋と漢字

西洋人の中国語学習者にとって，昔も今も，漢字はどうしても避けがたい難関である。漢字について，序文の中で，「学習者は漢字に特別に配慮してほしいと著者は強く勧める」²¹と書いている。

その理由は，まず，西洋人にとって漢字は全く新しい領域であり，特別の努力を払わなければならないのである。「中国語を除けば，あらゆる時代の言葉の学習は，私たちが子供時代からすでに築き上げた基礎の上に成り立っている。私たちはいくつかの音声記号としての字母を熟知している。そのような字母を簡単に連結したり，その組み合わせを見ただけではっきり発音したりする。その次にさまざまな組み合わせを覚えたりをする。これらは大きな労力の賜物である。あらゆるアルファベット文字の言葉を習うときにおいても，私たちはまったく同じ計画で進む。そして，日々，知らず知らずのうちに，われわれがすでに手にした成果の利益を享受する。しかし，中国語を習うときは，私たちはまったく新しい方法を用いなければならない。ここにはアルファベットがない。この種の文字は，見るだけではその発音を確認することがまったく不可能である。発音とは無関係に，この種の文字は意味を伝えようとするからである」²²。したがって，中国語学習の初心者にとって，最初の段階で漢字を覚えれば，後の学習にとって非常に有益である。「……最初からこのことを注意すれば，将来は

もっと容易に且つ楽しい進歩が得られる。中国語の学習を単に単語の発音に限定するより、進歩はもっと速いと著者は考えている。²³ 彼の話では、西洋人の宣教師の中には、数十年にわたって中国に住んでいて、言葉は話せるが、漢字を覚えられない人がいた。「著者は中国にいる10人ほどのカトリック宣教師を個人的に知っている。イタリア人、フランス人、ポルトガル人で、彼らは宮廷或は辺境地区に、14年から30年もいたが、たったの3人しか中国語を読めない。その内の4人は長年にわたって北京にいるが、漢字を一字も分らない。」²⁴

しかし、宣教師にとって、漢字を書けることは、東アジアの布教活動には非常に重要なことであった。なぜならば、その当時において、漢字と漢文は東アジア地区の共通語であったからである。「北はロシアとの国境から、西は中国のタタール地区全域まで、東はカムチャツカ半島まで、さらに朝鮮、日本、琉球群島、下ってはコーチシナと付近の島々、さらに、海の対岸のパナン、マラッカ、シンガポールないしジャワまで、至るところに中国系の移民がいる。こういう地区全体では、方言がかなりかけ離れているので、話し言葉は分からないが、中国語の書き言葉ならみな分かる。航海者、商人、旅行者、キリスト教の宣教師は中国語を書くことさえできれば、自分は東アジア全域で理解させるだろう。」²⁵ 近年さかんに議論されている「漢字文化圏」現象を実は19世紀初頭のモリソンはすでに気づいて、指摘している。

さらに、17、18世紀あたりに、西欧諸国で盛んに議論されていた「普遍言語」と「表意文字」について、本書では以下のように論じている。「ウィルキンズ司教 (Bishop Wilkins) は彼の『普遍言語』(*Universal Language*) という著作の中で、音の記号ではなく、あたかも中国語が所有すると彼が聞いたような、意味を表す記号やシンボルを備えた何らかのシステムを普遍言語として希望した。おそらく、中国語の書き言葉が万人のものになるかもしれないと期待するのも幻想ではないであろう。」²⁶ 「漢字が意味を表しているという点でどれほど成功しているか、そして、表音と書記の二つの長所が本当にあるとすれば、漢字が音を表していないという欠点を十分に補っているか、あるいはそれを凌駕するものであるかということは、中国語とアルファベット言語と両方を熟知しており、これを公正に比較できる人によって決定されなければならない」²⁷。イエズス会士の報告によって、漢字はヨーロッパの人々に知られるようになった。世界言語のバベルの塔以降の「混乱」から脱出して、単一言語へ回復する試み

の一つとして、アラビア数字や漢字のような「表意文字(ideograph)」を模倣して、さまざまな「統一言語」や「真正文字」が考案された。その中でライプニッツ(Leibniz 1646-1716)の「普遍的計算記号」(specimen calculi universalis)と J.ウィルキンズ(J. Wilkins)の『真正文字哲学言語試論』(*Essay toward a real character and a philosophical language*; London 1668)は特に有名であった。かつて、ラテン語が一時代前のローマ・カトリック教会に普遍的に役立ったように、プロテスタント教会に役立つ「真正文字」を新たに所有することは当の宣教師たちの願望であった。モリソンの議論はこのような時代と学問を背景にしてできたものであった。一種の古い議論の巻き返しにすぎないように見えるが、人間は異文化とのコミュニケーションをはかるために、多大な時間とエネルギーを外国語の学習にかけつづける状況を改善しなければ、このような巻き返しは形を変えながら繰り返されつづけるであろう。

おわりに

ロバート・モリソンの『通用漢言之法』は西洋人キリスト教宣教師の中国語学習の一助として編纂された一冊の「実用文法」書である。「実用文法」という言い方の背景に、「中国語にはいったい grammar があるのかどうか。たとえ有るとしても、いったいどのようなものであろうか」という難問が窺える。このような問題を解明するのは至難なわざであり、多大な時間を要する。当面、宣教師語学学習の急務を助けるために、このような理論問題をとりあえず棚上げし、宣教師たちがすでに身につけていた grammar の枠組を最大限に活用して、系統的に中国語を覚えさせることが「実用文法」の狙いであった。このような学習法はモリソンからはじまったのではなく、むしろ宣教師の語学学習の「伝統」的なものであったが、理論的な説明を試みたのはおそらくモリソンが最初であろう。当著作の構成は、英文法の枠組に中国語の例文を入れるだけですべてのことがすむ。故にその目的は中国語の文法を解明するより、むしろ、英文法に中国語でどう対応するのかにあるのだと思われる。

そのほかに、当著作は官話と方言、韻律学と作詩法など中国語のさまざまな面についても言及しているが、これらに対する詳細な研究は他日に譲るつもりである。

注釈

¹ Mrs. Morrison: *Memories of the Life and Labours of Robert Morrison*; London 1839. P.96: "Under the uncertainty in which we are, as to the spot where you may reside, it would be highly improper in us to restrict your conduct by any specific instructions. We must necessarily leave you at full liberty to act on every occasion according to the dictates of your own prudence and discretion. ……we hope you will find an opportunity of exercising the profession of a mathematician, and delivering lectures on its various branches; and also of giving instruction in the English language; ……We trust that no objection will be made to your continuing in Canton, till you have accomplished your great object of acquiring the language. ……perhaps you may have the honor of forming a Chinese Dictionary, ……or the still greater honor of translating the sacred Scriptures into a language spoken by a third part of the human race."

² R. Morrison: *A Grammar of the Chinese Language*, Serampore 1815. Preface: "it is the first work of the kind in English".

³ マーシュマンとその『中国言法』については、別の論文を準備しているので、ここでは言及しない。

⁴ R. Morrison: *A Grammar of the Chinese Language*, Serampore 1815. Preface: "The object of the following work is, to afford practical assistance to the student of Chinese. All theoretical disquisition respecting the nature of the language has been purposely omitted. On this subject much has already been said; but, as yet, in our language little practical assistance has been afforded to the student. It is hoped that this grammar will, in some degree, supply the defect."

⁵ ibid. p.122: 「動詞の未来形は『将』, 『将来』, 『後』, 『後來』などの単語によって構成される。例えば, 『我將有』。」

⁶ C. ランスロー=A. アルノー著+南館英孝訳: 『ポール・ロワイヤル文法』大修館書店1972年。p.5。

⁷ 呂叔相+王海榮: 『馬氏文通読本』上海教育出版社1986年。p.5: 「『文通』把字(詞)分成実字和虚字。実字五類: 名字, 代字, 静字, 動字, 状字; 虚字四類: 介字, 連字, 助字, 嘆字。這九類字的劃分大体上是合理的, 發展到現在, 除把字改為詞, 也還沒有什麼大變化。拿現在通行的分類來比較, 只是把数詞從形容詞(静字)中分出来, 单独成為一類; 增加了一類量詞。此外就是在某些詞類中分出若干附類, 如名詞中分出方位詞, 動詞中除馬氏已劃出的同動, 助動兩個附類以外, 又分出一類趨向動詞。」

⁸ R. Morrison: *A Grammar of the Chinese Language*, Serampore 1815. p.268: "As the adjective in Chinese has not, strictly speaking, though we use the terms, any distinction of gender, number or case, it necessarily agrees with the substantive; again, as the verb is the same in every person, in both numbers, it always agrees with its nominative; and finally, as the form of the noun is not altered by the influence of the verb, there is no place either for Concord or

Government, which two generally constitute the most material parts of the syntax of a language.”

⁹ *ibid.* p.268: “A few remarks on the right order of words in a sentence is all that can be included in the Syntax of a grammar of the Chinese language.”

¹⁰ *ibid.* p.268-272:

“1. A noun in the nominative case follows that connected with it in the positive, as: ‘This man’s son.’ 這個人之兒子。‘His Excellency the Viceroy of Canton and *Kwang-si.*’ 兩廣總督大人。

2. After the name of office follows the person’s name filling that office. Thus, 順德縣周祚熙。‘*Chow-tsee-he, the Heen of Shun-te*’ 香山縣彭。‘*Pang, the Heen of Heang-shan*’……

3. The time of an action, precedes the verb expressing that action. as, 他明天將來。‘He will come to - morrow’

4. In dates, the year precedes the month, and the month the day. ‘Thus A Petition of the first day, of the second moon of the 16th year of *Kea-King*’, rendered into Chinese is inverted. As, 嘉慶十六年二月初一日稟。

5. Adjective generally precede the noun. As, 高山。‘A high hill’ 好人。‘A good man’, Sometime they may either precede or follow the noun. As, 地方好大。好大地方。‘A very extensive country.’

6. When a particular emphasis is laid on the adjective, it follows the noun; also when it is accompanied by an adverb. As, 事情大。‘An important affair’. 這個係一端事做得很。‘This is an affair extremely base!’

7. The adjective is sometimes separated from the noun by the verb coming between. As, 大有關係。‘It has important consequences.’

8. *Voo* 無, at the beginning of a sentence, is understood to apply to every succeeding member, unless there be some turn in the expression. As, 無處不聞, 一方不見者。‘There is no place where it is not heard, no quarter in which it is not seen. ’……無義之不詳, 一音之不備。‘There should be no sense, (Of the character which was) not fully explained; no pronunciation which was not given.’

9. Two negatives make a strong affirmative. As, 其船無不被壞了。‘That vessel must inevitably be lost.’ 你無不知。‘You cannot but know, or-you know it fully.’ 你不得不知。‘You cannot but know, or-you must know.’”

¹¹ *ibid.* p.37: “It has already been observed, that words in the Chinese language consist of but one syllable; we now remark that these are all indeclinable. The number, case, or gender of Nouns produces no change of termination: they remain the same in every mood, tense and person of the verb.”

¹² *ibid.* p.60: “The Noun is the same in the plural as in the singular.”

¹³ *ibid.* p.62: “It is already that, strictly speaking, Nouns, in the Chinese Language, have no cases, for they do not undergo any change of termination.”

¹⁴ *ibid.* p.62: "but as this work aims only to afford practical assistance in the acquisition of the Language, the usual division of cases is retained."

¹⁵ *ibid.* p.37: "What is, in other language generally effected by declension and conjugation, is, in Chinese, performed by separate monosyllables."

¹⁶ *ibid.* p.62 - 3: "The cases of nouns are formed by particles. The particles *tee* 的 pertaining to, and *che* 之 pertaining to, from the genitive case, as, 憲官的筆. 'The pencil of Mr. *Hien*.' 孟子之母. 'The mother of Mencius.'" "The particles that form the dative case are chiefly *yu* 與 to, *kwo* 過 passing to, *tuy* 對 towards; over against. Thus 你與他送這箇. 'Present this to him.'……你對他說. 'Speak to him.'"

¹⁷ *ibid.* p.65: "The ablative is formed by the particles *yew* 由, from; *tsee* 自, from; *tsung* 從, from; *tung* 同, with; *e* 以, by. Thus, 他由英吉利國到廣東來了. 'He came from England to Canton.' 請尊駕同我出街. 'Pray, Sir, will you walk out with me?' 所惡於上勿以使下。"

¹⁸ *ibid.* p.113: "The verb remains the same through every person in both numbers. The Modes and Tenses are made by auxiliary words, the application of which we shall illustrate by examples."

¹⁹ *ibid.* p.113-5: "To have is expressed by the character *yew* 有. Indicative Mode: present tense: singular 我有. 'I have' 你有. 'Thou hast' 他有. 'He, she, or it hath or has.' Plural 我們有. 'We have' 你們有. 'Ye or you have' 他們有. 'They have.' 我有一本書. 'I have a book.'" "Interrogatively 你有甚麼貨物賣. 'What have you to sell?'" "Imperfect Tense 'I had.' 我先時有. 我前時有. 我從前有。"

²⁰ *ibid.* p.63: "The student, however, is not to expect the invariable use of these particles; they are often omitted, as 天朝法律 'The laws of China,' or, as they style their country, the Celestial Empire".

²¹ *ibid.* p. iii: "The writer strongly recommends it to the student to pay particular attention to the Chinese character."

²² *ibid.* p.1: "In learning any language, ancient or modern, Chinese excepted, we build on the foundation that was laid in childhood. We then acquired the knowledge of a few characters, the signs of simple sounds. To be able to combine these with readiness; to articulate a number of them joined together, on first seeing them; and to remember their various combinations, was the result of every considerable labour. In learning every alphabetic language we proceed on the same plan, and daily, though we may not advert to it, experience the advantage of our previous attainments. But in attempting the Chinese language we have to enter on an entirely new method. They have no alphabet. The character presents nothing to the eye by which its pronunciation can be ascertained. It attempts to communicate to the meaning, regardless of the sound."

²³ *Ibid.* p. iii: "If this be attended to at first, it will render his future progress more easy, more pleasant, and in the writer's opinion more rapid, than if he

confined himself merely to the pronunciation of words.”

²⁴ R. Morrison: *Chinese Miscellany*, London 1825. p.51: “The writer of this Miscellany knew personally ten Catholic Missionaries in China - Italians, French, and Portuguese - who had resided at Court, or on the frontier, from 14 to 30 years, and only three of them could read Chinese: -four of them had been many years in Peking, and did not know a single Chinese character.”

²⁵ *ibid.* p.1: “from the borders of Russia on the North, throughout Chinese Tartary in the West, and in the East as far as Kamschatka; and downwards through Corea and Japan; in the Loochoo Islands, Cochin China, and the Islands of that Archipelago, on most of which are Chinese settlers, till you come down to the equinoctial line at Pinang, Malacca, Singapore, and even beyond it on Java. Throughout all these regions, however dialects may differ, and oral language be confounded, the Chinese *written* language is understood by all. The voyager, the merchant, and the traveller, and the Christian Missionary, if he can *write* Chinese, may make himself understood throughout the whole of eastern Asia.”

²⁶ *Ibid.* p.1: “Bishop Wilkins, in his Work on a Universal Language, wished for some system of signs or symbols of ideas, such as he had heard the Chinese possessed, instead of signs for sounds. It is, perhaps, not chimerical to expect, that the Chinese written medium of thought will one day become universal.”

²⁷ R. Morrison, *A Grammar of the Chinese Language*, Serampore 1815. p.1: “How far it succeeds, and whether this advantage, if really possessed, equals or overbalances the obvious defect of not conveying the sound, must be determined by those who are masters of Chinese as well as of an alphabetic language, and so able to make a fair comparison.”